

## 4 部活動

### 4. 1 地学部

本年度は、39名の部員でSSH本体枠での活動に加え、重点枠に関する活動を実施した。また、引き続き多くの研究発表会に参加した。

#### (1) 学会・科学コンテスト・研究会での発表

ア 地球惑星科学連合2013大会高校生によるポスター発表（幕張メッセ）

イ 天文高校生集まれ！（大阪教育大学）口頭・ポスター発表

ウ 東海地区SSHフェスタ2013（名城大学）口頭・ポスター発表

エ 日本学生科学賞・JSEC2013 応募

オ 自然科学部交流会（名古屋大学）

カ AITサイエンス大賞（愛知工業大学）口頭・ポスター発表

ものづくり部門 優秀賞 「自作ドームによる星空の再現」

自然科学部門 奨励賞 「ホタルの会話と光害の影響」（生物部と合同）

キ 科学三昧inあいち2013（岡崎）口頭・ポスター発表

「The establishment of firefly's luminescence」時習館SSH海外連携プログラムに参加する部員の口頭発表



AITサイエンス大賞



科学三昧inあいち 英語発表

ク 高文連自然科学部研究発表会（名古屋市科学館）

ケ 日本天文学会ジュニアセッション（国際基督教大学）

#### (2) 観測・活動

東京大学木曾観測所KISS(超新星探査)に継続参加、いるか座新星を長期間測光・2回分光観測、パンスターズ彗星・アイソン彗星・ラブジョイ彗星の測光観測等、話題の天体について観測した。また、プラネタリウムドームの製作に取り組んだ。

#### (3) 成果と課題

ものづくりでは、高大連携講座で学んだスキルが活かされ、丈夫なドームが完成し、一般公開も実施することができ、コンテストでも高評価であった。

合宿では天候に恵まれ、豊富なデータを得られた一年であった。一方、ホタルの発光データ等、多すぎるデータ故に処理が追いついていなかったり、処理過程の見直しによる再処理に時間がかかったりして、十分な結果の得られていないテーマが多かった。部員増による多岐にわたるのテーマに、顧問の指導が不十分なことも要因である。初の入部制限を実施したことが効果となるかも知れないが、豊富なデータはうれしい悲鳴なので、時間をかけてしっかりした成果が得られるよう努力していく。